

天竜川の語りべ

子どもは昔も今も変わらない
いろいろな体験をすることが大切

●天竜川総合学習館かわらんべ館長
小林敏弘さん(飯田市在住)



小林さんは平成15年4月、かわらんべ2代目館長に就任。以後4年間、かわらんべの顔として、子どもたちの指導を中心に、地域の拠点施設として館の運営に注力してきましたが、この春退館。今後はボランティアとしてかかわっていきたくそうです。

生まれ育ったのは飯田市の山本。久米川で魚を釣ったりつかんだり、泳いだりして遊びました。子どものころ、家で乳牛を飼っているのを見て獣医になりたいと思っていました。高校を卒業して、進学しようと勉強していた矢先の6月に三六災が起きました。私のところでは小さい川がみんな氾濫するし、バケツから水をぶちまけたようでした。田植えをしてこれからというときに、裏山の土石流で田んぼがやられちゃったんです。そのせいも



かわらんべ講座などで自らの体験を子どもたちに伝える小林さん。一番の思い出は、昨年7月、地元の方たちの協力を得て初めて行った「かわらんべまつり」だそうです。



「天竜川が流れていて、飯田のシンボルの風越山があって、仙丈ヶ岳がきれいに見える。ここが最高の場所」と、かわらんべ前での小林さん。

あって市役所の試験を受けたわけなんです。三六災がなかったら、違う人生を歩んでいたかもしれません。

高度経済成長の時代は会社社会が中心で、地域社会というものが置き去りにされていました。遊びや民俗行事、地域のかかわりや川で遊ぶことも教えなかった。大事な部分が抜けちゃっていたんですね。今の親の世代が体験していないことを、一世代飛んで私たちが孫の世代に伝えていく必要があると思います。ですから、かわらんべの子どもたちには、私が小さいときに遊んだような内容を教えています。川で遊んだことや、野原で遊んだことなど、楽しかった体験を伝えたいですね。そうして、次時代を担う子どもたちにいろいろな体験をしてもらい、豊かな心をもった人間になってもらえるよう、そのための拠点にかわらんべがなってほしいと思います。



知ってナットク

なるほど! 天竜川

はんらんげん 氾濫原と狭さく部

氾濫原とは、洪水時に河川の流水が氾濫することによってできた平地のことをいいます。河岸段丘が発達している伊那谷では、天竜川から段丘までの平坦な土地がこれに該当します。一方、狭さく部とは、天竜峡、鷲流峡、坂戸峡、赤須峡、伊那峡などの峡谷のことをいいます。

天竜川上流部は、この氾濫原と狭さく部が交互に連続しているのが特徴です。昔から洪水の時は、狭さく部の上流で水が流れにくくなるため、流水が氾濫して水害が起りやすくなっています。



伊那川上流部の浸水(平成18年7月19日)



中川村小和田地区の狭さく部と氾濫原(平成18年7月19日)



上の写真と同じ地区を真上から見ると……

暖冬だったせいか、今年は春の訪れも早いですね。天竜川付近の植物も例年より早めに咲いていて、思わず出かけたくなります。でも、この春はいつもとちょっと違った天竜川を楽しんでみたいもの。その楽しみ方を「天竜びと」に聞いてみました。新しい発見が、きっとあるはず!



天竜びとが語る「河川愛護」

天竜川は“恵み川” 昔の思い出を呼び戻したい

●河川愛護モニター
鳥山竹治さん(箕輪町在住)



鳥山さんが河川愛護モニターになって丸3年。多い月はほぼ毎日天竜川へ出かけ、川の状態を確認しています。気づいたことはその都度、手帳に記録しているそうです。

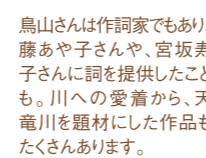
天竜川にはガマやヨシが生え、ヨシキリが鳴いていました。ホタルを追いかけたり、仕掛けをつけて魚をとったり、泳いだり。天竜川にはたくさんの思い出があります。そんな天竜川の昔のよさを、これからの子どもたちにも経験してもらえるように、自分たちのできることは何だろうと考え、河川愛護モニターとして活動しています。

河川愛護モニターの役割は、川に異常があったときや、ゴミの不法投棄を見つけたときなどに河川管理者に連絡をしたり、地域の要望を伝えたりすること。明神橋から新箕輪橋まで、ひと回り30~40分くらいです。釣りをしている人や散歩やジョギングをしている人は、みんな顔なじみです。

モニターとして天竜川に出かけることは、毎日の楽しみになっています。その日ごとに違う流れや風景が見られますが、私が好きなのは新箕輪橋からの景色。ここからの眺めは本当にいい。川と山が大きく広がっていて、昔の天竜川の姿が残っています。春になると河原の柳がどんどん緑になり、ワタが舞いはじめます。子どものころ、ヨモギやナズナをつんだ思い出もあります。天竜川は“恵み川”。みんなできれいにして昔の思い出を呼び戻したいと思っています。



鳥山さんお気に入りの新箕輪橋からの眺め。写真は下流方面。自然の大きさが感じられる風景ですね。



鳥山さんは作家でもあり、藤あや子さんや、宮坂寿子さんに詞を提供したことも。川への愛着から、天竜川を題材にした作品もたくさんあります。

山の春の到来は 五感で知ることができます

●山岳ガイド
知久平 彰さん(飯島町在住)



山岳ガイドを始めて約50年。「体が弱く、川の端で半日ぼんやりしているような子ども(知久平さん)だったのですが、中学での学校登山が自信となり、山や自然の魅力にひかれて高校では山岳部へ。自身の経験からも、子どもたちにも自然体験を、願っています。」

春の山に登ると、植物が目覚める、山が目覚める、そんな風景に出合えます。木々が香ってくるんです。2月には早々とマンサクの花が咲いているのを見つけました。“まず咲く花”という意味から“マンサク”と呼ばれるようになったともいわれていますから、春を知らせる花でもあるのでしょうね。木の枝先にふんわりと黄色く咲くダンコウバイやカタクリなどを見ると春が来たんだと感じます。

雪渓からボタボタと水滴が落ちるところを見るのも山のおもしろさのひとつです。一滴の水が小さな流れを作って大きな天竜川となり、天竜川は海へと注ぎまた雨になって山に戻ってくる。山から伊那谷や天竜川を眺めながらそういうことを考えたりすると、「地球」というものを感じたり、自然の様子が俯瞰できるんです。

風の音や鳥の声を聞いたり、植物や土においを嗅いだり、木々に触れてみたり、五感を使って、山の春を、そして伊那谷の自然を、感じてもらいたいと思っています。私の住む飯島町のまわりにも、いい山がたくさんあります。



知久平さんが山で見つけたマンサクの花と一緒に。文化館に飾ってもらっていたそうです。

天竜びとと楽しむ春

さあ、春です! 見る? 参加する? 天竜川で楽しもう!!



天竜びとが語る「雪形」

山に「島田娘」が見えてくると心が軽くなります

●長野県民俗の会会員
塩澤 一郎さん(駒ヶ根市在住)



「駒ヶ根紀遊」という江戸時代の絵図に描かれた雪形を説明する塩澤さん。5月に開催される駒ヶ根市立博物館の「雪形を見る会」ほかで講師を担当する予定です。

今年も「雪形」が見える季節になりました。雪形とは、名前のとおり雪解けなどによって山の表面に現れる形のことです。戦前は雪形のことを「岳の残雪」と、また「島田娘」を「嫁さま」と呼んでいたそうです。その歴史は古く、江戸時代に高遠藩が周辺の山を検分した記録にも書かれていましたし、農事暦として長く使われてきました。今では見て楽しむものになりましたが、そのいわれを知ることで、雪形の観察がより楽しくなります。

中央アルプスで有名なのは、駒ヶ岳の名前の由来となった中岳の駒形。将基頭山の種時爺・婆、左八の字、双馬、南駒ヶ岳の五人坊主など、ざっとあげても20~30種類の雪形があります。雪形を見る場所は、駒ヶ根市でしたら昔の台や駒見大橋。伊那市ですと富県周辺や高遠の三峰川河川敷。飯島町では千人塚などがおすすめです。

自宅の裏から宝剣岳を見上げ「島田娘」が見えるようになると、春を感じ、心が軽くなります。4月から7月ごろまでの1シーズンに20日以上、雪形の調査に出かけます。ひとつの雪形を、見た目がきれいな形で写真に取るためには、何年もかかります。“生きがい”なんていうと大げさかもしれませんが、新しい雪形を発見するのは本当に楽しいです。



宝剣岳から南へ続く稜線の東斜面に、日本髪を結った女性の横顔のような「島田娘」、その左に「種時小僧」と呼ばれる人の姿をした雪形が見えます。2005年5月4日塩澤さん撮影。

雪の台から望む伊那前岳に現れる「黒蝶」の美しい姿が楽しめます。2003年5月10日塩澤さん撮影。



自宅で作られた研究室には、上下伊那を中心に、県内、新潟県、愛知県、静岡県など研究フィールドの資料がすべて収められています。調査では必ず「野帳」と名付けた小型のノートを持ち歩き、その場でメモ。「野帳」はすでに数十冊に。



天竜びとが語る「名勝」

●天龍峡温泉観光協会会長
北原 郁さん(飯田市在住)



観光協会の会長になって5年の北原さんは、天龍峡屈指の旅館・龍峡亭の女将でもあります。「ここ(龍峡亭)から見る景色が一番好き。特に朝霧がすばらしいです。霧の上り方も、まっすぐ上がった、川に沿って上流にあがったり、渦を巻いたり。川の表情は毎日違う」

地元の保育園の園児が参加する稚児行列。春の観光祭りでは、地元の名物を買って食べられる食コーナーも充実しているほか、宝投げなど参加して楽しめるイベントもあります。



天龍峡の春を駆け抜けるマラソン大会。今年の申し込みは締め切られているので、応援とお祭りへどうぞ。また、観光協会では遊歩道の整備に力を入れているので、スタンブラーが楽しめるウォーキングが大人気だそうです。

冬枯れから目覚め、息づいてきた名勝 天龍峡では、3月16日に川開きが行われました。冬の名物「こたつ舟」はこの日を境に衣替えです。冬の風物詩の衣替えが終わると、3月下旬から赤紫色のミツバツツジが咲き始め、岩の間が真っ白くなるコマバナ(ユキヤナギ)、そして樹齢200~300年という古木もあるヤマザクラと、天龍峡ではいろいろな花が7月まで咲き続けます。4月の終わりごろからは新緑の季節。峡谷全体が薄黄緑色に染まります。

4月15日は「飯田春の観光祭り」です。稚児行列や獅子舞、鼎太鼓などの伝統芸能をぜひ見ていただきたいですね。また、同じ日に「天龍峡温泉健康マラソン」も行われるんです。だいたい700人くらいの方が参加しますね。天龍峡の人はお祭り好きなんです。ですから、地元の人たちで作るお祭りとマラソン大会を、たくさんの方に楽しんでいただけたらうれしいです。

そして4月9~10日には、「全国さくらシンポジウム」が飯田で開催されますので、この春はいつも以上にぎわいそうです。

川を眺めながらのウォーキング、四季折々の味覚狩りができる観光農園、日帰り入浴も楽しんでいたける温泉と、春の楽しみ方はたくさんあります。今年、「天龍峡」の名が誕生して180周年。昔のにぎわいと天龍峡の美しさを、また、よみがえらせていそうですね。



天龍峡の岩間に咲くヤエリ(7月ごろ)。ヤマザクラのあとには、イワツツジ、ササキ、ヤマブキ、フジの花、ヤマユリなどが咲き、天龍峡はまたまた花の季節です。

春の花と祭り、とマラソン、どにぎわいます